

## 「供養のころ」

山口県防府市 天徳寺 住職 森江裕孝

私がお預かりするお寺の本堂には、参拝者のお名前を記入する「供養帳」があります。ご祈願に来られた方は、供養帳という名前を見て記帳すべきか迷われることが多いようです。日本では「供養」と言うと、亡くなった方のご冥福を祈ることをイメージする方が多いからです。

「供養」とはインド由来の言葉で、元になった言葉「プージャー」は、敬意を持ってねんごろにもてなすことを意味します。初期には敬うべき対象に、灯明、お香、お花、食べ物、資材などを供えることが「供養」とされてきました。後にそれらの供物だけでなく、礼拝や読経といった「行」も「供養」となり、さまざまに「供養」が生まれました。

「供養」の対象は、元々お釈迦さまや、教団のお坊さんたちでした。そして、お釈迦様の舍利（遺骨）を納めた仏塔、さらに時代が下って大乘仏教が盛んになってからは、お釈迦様以外の仏さまや菩薩さま、そして経典も供養の対象になりました。供養には大きな功德があるとされ、信者は供養をすることによって幸せを願います。

供養の対象の違いこそあれ、お灯明、お香、お花、食べ物をお供えて拝むという行為は、二千五百年の時を超えはるかインドから日本にも伝わっています。皆さんもご自宅の仏壇、お墓のご先祖にお参りされると思います。特にお盆や、お彼岸、ご命日には墓参りで、お花や、お香、ご先祖の好きだった食べ物をお供えて手を合わせます。ご先祖を敬いご冥福をお祈りし、自分や親族の幸せを願う心は、次の世代にも受け継がれていくことでしょう。私たち僧侶も、供養されるにふさわしい存在であるよう日々勤めていきたいものです。